

海外留学 ——その心構えと各国大学事情——

前号の留学体験談に引き続いて、本号では、留学を志している諸君への助言として、①留学するにあたっての心構え、②各国の大学の現況、③留学手続き（フローチャート）、④資料として、各種奨学金制度、交換留学の協定を結んでいる各国大学の紹介を専門家の方々にお寄せいただいた。

(広報委員会委員長 川上英之)

留学の心構え

留学の心構え

——留学を有意義なものにするために——

大学教育研究センター 江 淵 一 公

1. 留学と遊学—はじめに—

1990年代に入り、1970年代後半のブームに次ぐ第2次海外留学ブームの時期を迎えたようである。最近、海外留学ガイドブックや専門誌がよく売れているという。大学生や院生だけでなく、一般社会人や高校生まで、長期、短期さまざまな形の留学が増え、夏期、春期のバック旅行式留学（研修）も人気があるようだ。留学に関する情報量の増大と、何よりも円高が海外渡航を身近なものにしたのだろう。

いったいどれくらいの日本人が留学しているのだろうか。法務省の『出入国管理統計年報』（平成2年度版）によると、「留学・研修・技術修得」を目的とする渡航者数（1989年度）は113,234人で、渡航者総数（9,662,752人）の1.2%を占める。対前年比33.7%増で、渡航種別の中で最高の伸び率である。留学と旅行の区別はつけにくく、短期の語学研修などは「観光等」の種別中に含まれている可能性も高いので、それらを考慮すれば、広い意味の留学による渡航者数はもっと多いといえよう。世はまさに留学大衆化の時代である。

公費、私費を問わず、今日の日本の「大衆型留学」は、かつて近代日本の曙の時代にみられた国家とか国益に資するというような使命感にあふれた「国益型留学」とは異なり、個人的な動機・目的によるもの（個人益型留

学？）が主である。ところが、この大衆型留学では、留学が一種のファッションと化し、はっきりした目的もなく留学を志す付和雷同型の“遊学生”が増える傾向があると指摘する人もある。

好奇心に満ちあふれ、新しいことは何でも吸収しようとする、貪欲なほどの学習意欲と柔軟性を備えた若い時代に外国を訪れ、異文化を体験することは、それだけでも十分意味のあることだと思う。しかし、ただ漫然と出かけたのではその意義も半減する。せっかくのチャンスを十分に生かすためには、それなりの心構えが必要である。

2. 何のために留学するのか

いうまでもないことだが、留学を意義あるものにする上で何よりも大切なことは、何のために、また何を期待して外国へ行くのか、目的・目標をしっかりと意識化することである。目的にも、当面の目的と遠い目的とがあるだろう。それらをはっきりさせることも必要である。「外国語を修得するために」という目的も結構だが、もう一步突っ込んで、「何のために外国語を学ぶのか」を考えておきたい。反面また、留学に対し期待過剰になってはいけぬ。留学さえすれば何でも手に入るかのような幻想を抱いている人があるが、私の経験からいうと、そういう人に限って失望落胆

し、中途挫折しがちである。限られた期間内に目的を達成するには、現実的な見通しと冷静な判断力が不可欠である。

外国留学は、日本で学べないものを学びに行くのである。それは、外国語の修得や日本にない学問とか、日本より進んでいる分野の学問の最先端を学ぶという本来の目的の他に、異文化を知り、それによって視野を広げたいという期待もあるだろう。特定分野の研究を目的とする留学にしても、その学問を育ててきた風土・文化を知ることが有意義なことである。現代のように国際的相互依存が高まり、国際関係が緊密化する時代には、国際理解の増進は不可欠の条件であり、留学はそれに貢献するものでなくてはならない。留学は、同学の士、専門家仲間との国際的協力のネットワークに参加するきっかけを与えるというだけでも大きな意義を持つ。その観点からいえば、一人でも多く、相手国に信頼できる友人をつくるのが大切である。私は、長く（できれば一生）つき合える友人を一人でもつくるのができたなら、留学の目的は半分以上達成できたといってもよいほどだと考えている。しかし、そこに達するまでには、いくつかの乗り越えなくてはならない障壁がある。

3. カルチャー・ショックに学ぶ

外国に出かけるに当たっては、言葉の準備は当然のこととして、渡航先国の生活環境や習慣について、できるだけたくさん情報を入手しておくことが望ましい。しかし、どんなに周到に準備したつもりでも完璧ということはまずあり得ない。私の経験からいうと、賢明なやり方は、あまり細かいことに気を回すよりも、日頃から柔軟な生活態度と自分自身を冷静に観察する態度を身につける努力を怠らないこと、それに加えて「異文化適応の心理」を多少心得ておくことである。

（境界人としての留学生）留学生とは、自分の国の文化と滞在国の文化の狭間におかれた「境界人」(marginal man) である。境界人とは常に緊張を強いられる存在である。異国

で生きて行くためには、まず、相手国の言語に習熟し、食生活をはじめとする現地の人々の生活習慣になじみ、彼らの文化を吸収しなくてはならない。ざりとて移民とは違い、留学生はいずれは帰国する身であるから、相手国の人間になりきってしまうわけにはいかない。常に一歩距離をおく態度が要求される。いいかえれば、同化と離反、依存と独立という対立的な要求に対応しなければならないのが境界人である。この状態は、いずれの国・文化にも完全には帰属しない中途半端な状態であり、この心理的に不安定な状態が緊張と動揺をつくり出すと考えられる。

そうした留学生という存在の基本的性格を認識しておくことは適応の上でも役に立つはずである。なぜなら、それによって、「カルチャー・ショック」の自己診断が可能になるからである。

（カルチャー・ショックとは）留学生の適応がどのような過程を経て進むかについては、アメリカを中心にさまざまな研究が行われてきた。適応は個人差が大きいので一般化がむずかしいが、大ざっぱに言えばいくつかの段階がある。中でも渡航してすぐの数か月の初期段階が肝要で、この時期にいろいろなことが起こる可能性がある。

この時期は、当初しばらくは、あこがれの国へきた喜びも手伝って、経験することのすべてがもの珍しく思われ、興奮が続く“蜜月期”である。だが、その一方で、言葉の問題を始め、自国で身につけてきた行動の型がそのままでは通用しないという問題に当面し、そのため、いらだちや違和感、戸惑い、あるいは反発さえも生じ、当初すばらしいと思われたことも鼻につくようになるなど、複雑なアインビヴァレンス（好悪併存の両面感情）の心理的状态が徐々に高まってくる。国内でも、環境が変わると心身のバランスが崩れやすくなるが、異文化の中ではその度合いがひどくなる。

そうしたバランスの乱れは、いろいろ、孤独感、下痢、不眠などの心身症的な兆候になっ

て現れる。これがカルチャー・ショックである。ショックが激しい場合、この国は自分を拒絶しているのではないかとすら感じることもある。そうした被拒絶感から、極度のホームシックにかかりノイローゼになってしまうこともある。政府留学生としてイギリスに留学し、神経症に悩まされ下宿に閉じ込められてしまったという夏目漱石はその一例である。

もっとも、これには本人の性格や態度、滞在期間、滞在形式（単独か団体か）、それに受入れ側の環境条件などが大きく関与し、すべての人が同じカルチャー・ショックを経験するとは限らない。また、後に触れるような、大学教育のスタイルも関与するせいか、文系（とくに社会科学系）と理系とでは差が大きい。一般に、理系の学生は文系に比べて違和感が少なくてすむようである。

こうしたカルチャー・ショックは、バック旅行の研修や短期間の留学ではほとんど経験せずすむが、数か月から1年以上、単独で異文化の中に放り出された場合にはしばしば起こる。単独留学の場合も、言葉に不自由が少なく、柔軟で積極的、外向的な性格・生活態度の人は、受入れ側によほどの閉鎖的、差別的態度がない限り、ショックを経験する度合いは小さい。しかし、どんな条件であれ、留学にはある程度のカルチャー・ショックはつきものと覚悟し、多少の人種的偏見や差別に出会ってもいちいちムキにならない度量の大きさが欲しい。そして、積極的に相手国の人々（他国からの留学生も含む）と交わるようにするのが賢明な適応の仕方である。最初の緊張と困惑の時期をすぎると、緊張は次第に緩和されて行く。そうすれば、ショック症状もいつのまにか消えてしまう。

（異文化理解のカギとしてのカルチャー・ショック）カルチャー・ショックは辛い経験ではあるが、マイナスばかりではない。むしろ、自文化と異文化との違いを理屈でなく実感をもって教えてくれる貴重な体験である。カルチャー・ショックは、ある意味では自文化中心主義（ethnocentrism）との戦いである。

それを克服することを通して、感情的でなく理性的に相手国の人々の生き方をとらえること（文化相対主義（cultural relativism）的な見方の獲得）ができるようになる。留学先でも同国人とばかりつきあっていれば、カルチャー・ショックは少なくてすむかも知れないが、そのかわり、現地文化を深く理解するチャンスは失われ、留学の意義も半減する。だから、いくら寂しくても日本人だけで固まって、現地の人々の悪口をワイワイ言い合って気晴らしをするなどということは避けた方がよい。在日外国人留学生にも一部にこの傾向がみられ、私は残念に思っているが、異文化の中ではとかく起きやすいことだけに注意したい。相手国について十分知った上で批判を持つことは結構だが、初期の段階では、よく知らない上に、しかもカルチャー・ショックが手伝って、相手国のとらえ方が知的冷静さを欠き、えてして感情的なものになりやすいのである。

4. 欧米の大学の教育のスタイルへの適応

自国と留学先国の教育のシステムやスタイルの違いも、カルチャー・ショックの一因となることがある。したがって、教育方式の彼我の差異をあらかじめ知っておくことは、カルチャー・ショックを緩和し、成果をあげるためにも有益だと思う。参考までに、私の個人的な体験を述べてみよう。

（授業）私の留学体験はもう30年近くも前の古い話になるが、基本的には現在も当てはまると思う。私は、1960年代の始め頃、アメリカのニューオーリンズにあるチュレーン大学にフルブライトの大学院留学生（文化人類学専攻）として学んだ。日本の大学院を二応経験してからの留学だったが、アメリカの大学院教育は日本のそれとはまったく違っていて面食らった。とにかく、やたらと忙しいのである。授業は講義でも宿題（reading assignment）がどっさり出る。それも1科目ではないから、週によっては300～500ページを読まされることもあった。1～3日しか貸

出できない指定図書 (reserved book) を大急ぎで読むのは、英語の下手な留学生にはたいへんなことである。しかし、読んでおかないことには講義について行けないし、意見や感想を求められることも多いから手抜きできない。それに加えて、入学したてのころは講義のノートがうまく取れず閉口した。フォローできなかった部分は級友からノートを借りて埋めたが、いまみたいに手軽にコピー機を使えない時代のことだから手で書き写すしかない。最初の一学期は、毎週末、宿題とノート写しに追われ通しだった。

(試験) 試験も厳しかった。日本と違って、同じ科目の授業が毎週2回から3回あるシステムで、その週の最後の回になると、「クイズ」(quiz) と称する15分程度の豆テストがあり、これを毎週クリアしないと中間試験を受けさせてもらえないし、中間試験をパスしていないと学期末試験の受験資格がない。無事にそれらを全部クリアした上に10ページくらいの期末レポートを提出させられることもあった。こうしてやっと単位がもらえた。すべての科目がそうとは限らないが、だいたい似たようなものだった。講義でさえもこの調子だから、口頭発表を求められる演習 (seminar) はもっと大変だった。留学中は本当によく本を読んだと思う。私の人生でいちばん勉強した時期だったといえるかもしれない。

(教育原理) 渡米する前は、アメリカの大学は学生の自主性を尊重すると聞いていた。だが、それは「基礎ができた」(文化人類学の場合、専攻分野の諸概念や民族誌的基礎知識をマスターし、主要学説をひと通り理解していること) と認定されてからのことで、大学院といえども初期段階では、学説史や基礎的な知識は徹底的にたたき込むという方式であった。えらいところへ来たものだと驚いたが、そうした勉強をしておかないと、学位論文を書く資格 (Ph.D. candidate) を得るための総合学力試験 (comprehensive exam) (これが研究者になるための基礎学力認定試験に

相当する) をクリアできないのである。そのかわり、カリキュラムは、専門分野の体系的な知識が獲得できるように系統化されているから、指示された通りに学習を進めて行けば、必要な知識がだいたい身につく仕組みになっている。もっとも、それはあとになって知ったことで、入学したばかりのころは、毎週の宿題をこなすのに精いっぱい、そうした仕組みまで理解する余裕はなかった。

5. 語学力とコミュニケーション能力

外国の大学で留学の成果を上げるための条件として、もう一つ触れておきたいことがある。それは、コミュニケーションに関することである。

日本人は一般に、他の国の人々に比べて外国語が下手だといわれる。私も残念ながらそう思う。しかし、それは単なる語学力の問題ではなく、もっと基礎的なコミュニケーション能力の問題ではないかと思う。日本人は日本語を使う場合でも、討議では引っ込み思案だったり、すぐ感情的になったりして、議論が上手とはいえない。国際会議に出るたびに痛感することだが、日本人は一般に (自分自身を含めて)、自説を説得力のある表現法を用いて理路整然と述べる能力において外国人に比べかなり見劣りする。これは、語学力の問題というより、根本的には対話能力の未熟さによるものだと思う。欧米では、小学校の段階から “Show-and-Tell” や “Debate” と呼ばれる時間や機会を設けて自己表現術 (売り込み術) と論争術の訓練を受けて育つ。「こんなことをいったら笑われはしないか」と、人前を気にしがちな日本人が太刀打ちできないのも無理はないと思う。そうした基礎訓練の欠如からくる弱気を外国語のせいにしてはいないだろうか。

大勢の仲間と一緒にいる時は威勢がいいが、一人になると「借りてきた猫」みたいになるのが日本人の一般的性向である。孤立無援でも正々堂々と所信を述べる勇気がないと国際社会ではバカにされる。「寡黙」を美德とし、「以

心伝心」「村度」のコミュニケーション美学を理解してくれる人は、残念ながら外国では少ない。私は常々、日本人が国際化社会で生き延びるには、まず、引ら込み思案や妙な遠慮を克服し、自立性と個性を確立する努力が必要であり、次に、論理的で説得力のある表現法を駆使する力を磨くことが課題だと考えてきた。留学は、そうした日本人の弱点について自己認識させてくれるだろう。そうした弱点をどう克服するのか、留学を絶好のチャンスとして考究してほしいと思う。

6. 相互交流としての留学—むすびにかえて—
最後に、留学とは互惠主義の原則の上に成り立つものであることを強調してむすびとしたい。留学に際しては、ともすれば自分の期待や都合だけを考えがちだが、留学は受け入れてくれる相手があって初めて成り立つものだというのを忘れてはならない。留学が「教育交流」と呼ばれるのは、教育に関する価値を相互に交換し裨益し合う互惠主義、すなわち「ギブ・アンド・テイク」の原則が前提となっているからである。留学先の国から知識や技術を「もらう」だけでなく、こちらも相手国の人々に何かを「あげる」あるいは「お返しをする」ことが「交流」である。留学生の場合、お返しの大部分は将来の“出世払い”ということになるだろうが、滞在中もその精神だけは忘れないようにしたい。「お返し」といっても何も大げさなことを考える必要はない。自分の持ち味や特技を生かして現地の人々の手助けをすることもそれに入る。外国では、いろいろな機会に専門分野についてだけでなく、日本文化一般について、「日本ではこの点どうするのか?」という

た質問をされることがある。そのような場合に、的確な回答や示唆を与えることができるだけでもりっぱな貢献(国際理解の促進)だと思ふ。私は以前、「日本人は結婚式は神前で、お葬式は仏前ですと聞いたが、なぜ分けるのか?そもそも神と仏はどう違うのか?」という思いがけない質問を受けて往生したことがある。そうした質問のすべてに答えることは不可能だとしても、可能な限り筋の通った説明を試みることは留学生としての責任であり、また「お返し」になると思うのである。

「異文化は自文化を写す鏡」といわれるが、それは、異文化に照らしてみると、自文化の特徴や問題点がはっきり浮かび上がってくるからである。現地の人々から発せられる日本についてのさまざまな質問は、日ごろ意識することのなかった日本文化の諸側面について、「われわれはなぜそうするのか」といった視点から、改めて考える機会を与えてくれる。私自身、発せられた質問に対し相手を満足させるような答えができず、自分がいかに日本について無知であったかを思い知らされたことも再々で、それがきっかけになって改めて考えたり勉強したりしたことも多い。そういう意味でも、日本について尋ねられることは歓迎すべきことだと思う。しかし、できれば、そうしたことに的確に対応できるように、自分自身の日本についての認識を日ごろから深めておきたいものである。留学生自身には“日本代表”などといった意識はなくても、相手からみれば、身近な日本代表なのである。ことさらに意識して肩肘を張る必要はないが、留学には必然的にそうした側面が伴うことを覚悟しておいてほしいと思う。